九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『源氏物語』の夕顔と松浦地方

西丸, 妙子
元福岡国際大学教授

https://doi.org/10.15017/13178

出版情報：語文研究. 104, pp.18-33, 2007-12-21. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『源氏物語』の夕顔と松浦地方

西丸妙子

[はじめに]

夕顔巻の造形には、九州肥前松浦地方にゆかりのある二つの作品が踏まえられているのではなかろうか。『肥前国風土記』に残されている「松浦郡　褶振峯」の話と『万葉集』の「松浦川に遊ぶ」関係の歌と序である。その松浦は紫式部の親友が下向して亡くなった所なのである。

一

その女友達は、『紫式部集』によれば独身時代にもっとも親しかった人のようである。紫式部の父藤原為時は長徳二（九九六）年夏に越前守として彼女を同道して下向しているが、ちょうど同じ頃その親友も、父か夫に従って肥前へ下っている。(注1)

『紫式部集』(注2)によると、

「　姉なりし人亡くなり、また人のおとと失ひたるが、かたみにあひて、亡きが代りに思ひ思はむといひけり。文の上に姉君と書き、中の君と書きかよひけるが、おのがじし遠き所へ行き別るるに、よそながら別れ惜しみて

15　北へ行く雁の翼にことづてよ雲のうはがきかきたえずして」

「　筑紫に肥前といふ所より文をおこせたるを、いと遥かなる所にて見けり。その返り事に

18　あひみむと思ふ心は松浦なる鏡の神や空に見るらむ

返し、またの年もてきたり

19　行きめぐりあふを松浦の鏡には誰をかけつつ祈るとかしる」

「　遠き所へ行きし人の亡くなりにけるを、親はらからなど帰り来て、悲しきこと言ひたるに

39　いづかたの雲路と聞かば尋ねまし列はなれたる雁が行方を」

この他6・7・8・9・10・16・17番歌も関連の贈答である。義姉妹の契りを結ぶほどに親しかった友との離別の悲しみ、さらにまみえることなく遠国で死去した友を悼む紫式部の喪失感は想像できよう。その痛切な心情が『源氏物語』に影を落とさないはずはないと思うのである。

その友は、物語に興味を持つ紫式部に、住み着くことになった肥前の伝説や文学作品などを手紙に書き記すことはなかったか。あるいは式部の方も、友の居る（居た）肥前に関する作品などに目がいったかもしれない。その肥前でおそらく当時においてももっとも有名な話が「褶振峯」説話（松浦佐用姫説話）であり、作品のほうは『万葉集』巻五の「松浦川に遊ぶ」の序と十二首の歌であろう。以下その二つの作品がどのように夕顔巻の構成や夕顔の人物造形に取り込まれているかということを見てゆきたい。

二

『源氏物語』で源氏は夕顔に通い始めてからも、装束をやつし身分素姓を明かさず顔も隠している。その構想が三輪山説話を踏まえていることは周知のことである。三輪山説話として記されているのは、『古事記』中巻の崇神天皇の条であり、夕顔の該当部分とその三輪山説話の話柄を比較してみると、両者の一致点は男が素姓を隠して夜半に訪れることであるが、三輪山の場合、男は「其形姿威儀、於時無比」（古事記）とあり、顔を隠してはいない。女が男の素姓を探索することは両者一致するものの、そもそも三輪山説話は神生みのめでたい話なのである。三輪山説話の類話は各地にあり、ゆえに三輪山型（式）説話とも称され、細部に違いがあるので、紫式部が三輪山型説話を取り込んでいることは間違いないとしても、それが『古事記』に記す話柄との限定はできない。

肥前松浦地方にも三輪山型説話が残されている。『肥前国風土記』の「松浦郡　鏡渡・褶振峯」の両項である。「鏡渡」は大伴狭手彦が任那に遠征するときに、契りを持った篠原村の弟日姫子に鏡を贈った話である。続く「褶振峯」を掲げる。(注3)

「大伴の狭手彦の連、發船して任那に渡りし時、弟日姫子、此に登りて、褶を用ちて振り招きき。因りて褶振の峯と名

づく。然して、弟日姫子、狭手彦の連と相分れて五日を経し後、人あり、夜毎に来て、婦と共に寝ね、暁に至れば早く帰りぬ。容止形貌は狭手彦に似たりき。婦、其を怪しと抱ひて、忍黙えあらず、竊に績麻を用ちて其の人の襴に繋け、麻の随に尋め往きしに、此の峯の頭の沼の邊に到りて、寝たる蛇あり、身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の脣に臥せりき。忽ち人と化為りて、即ち語りていひしく、

篠原の　弟姫の子ぞ　さ一夜も　率寝てむ時や　家にくださむ

時に、弟日姫子の従女、走りて親族に告げしかば、親族、衆を発して昇りて看るに、蛇と弟日姫子と、竝びに亡せて存らず。ここに、其の沼の底を見るに、但、人の屍のみあり。各、弟日姫子の骨なりと謂ひて、即て、此の峯の南に就きて、墓を造りて治め置きき。其の墓は見に在り」

ここに「弟日姫子」として出ているのは、『万葉集』巻五の大伴旅人などの歌では「松浦佐用姫」の名になる。この褶振峯説話はまさに三輪山型のそれであるが、『古事記』の三輪山説話よりはるかに夕顔巻の構成に通じる。両話の一致点を挙げてみると（⇕の上段が褶振峯説話、下段が夕顔巻）

i．女は死ぬ…弟日姫子⇕夕顔

ii．侍女の役割が大きい…従女⇕右近

iii．女の亡骸を見に行く…親族と衆⇕源氏と惟光

iv．不気味な雰囲気…沼の蛇と呪いの歌⇕物の怪と怨み言

これらは夕顔巻の構成には重要な要素であるが、『古事記』の三輪山説話には存在しない事柄である。三輪山型説話で共通することは、男は蛇の化身であり、変身しては蛇となり人間となる。ちなみに夕顔巻で源氏が顔を隠し、それを剥ぐ行動は、蛇にちなんで化身から本体を現すことを象徴させているのであろう。

夕顔の巻の構成の骨子は褶振峯説話が凡そ持っているといってよい。ということは紫式部は親友に関わる肥前松浦の説話に着想を得て、夕顔巻を構想したとは考えられないだろうか。

なぜそのような着想をしたのだろうか。それは物語創作への興味からというよりは、友が住んだ地で蛇に魅入られて死んでいった褶振峯の女に、亡き友の死を重ねて悼む痛切な思いからではなかったろうか。説話では女は蛇に殺されたが、夕顔は荒れた所に住み着いていた物の怪に殺された。ともに異界のものに魅入られるような素晴らしい女であったということにもなろう。紫式部は亡き友を『源氏物語』の中で再生し、死には源氏の魂を絞って悼ましめることが、式部の友への鎮魂の方法ではなかっただろうか。

三

顔を見せた源氏は夕顔に名のらせようとする。しかし夕顔は「海人の子なれば」[注4]と答えて明かさない。これについては諸注が『和漢朗詠集』の「白波の寄する渚に世を過ぐす海人の子なれば宿も定めず」（遊女　海人詠）[注5]が引歌であるとする。それは夕顔が居所を転々とすることや低い身分であることが根拠とされているが、この歌と夕顔巻成立の前後関係の疑問は残る。夕顔巻執筆の頃にすでに存在した歌であろうか。

ところで夕顔の「海人の子なれば」の後に省略されている言葉はその歌によれば、「宿も定めず」であるが、『源氏物語』よりかなり後まで、海人（女）が定住しない流浪の民であるか、あるいは家も持てない階層であるとの固定観念は歌の表現では見られない。とすれば『和漢朗詠集』の歌が「宿も定めず」と詠んだのは特異な発想ではないのか。

ここに前述の夕顔と肥前松浦の地との線から、「海人の子なれば」の一文のみならず、夕顔造形の深淵にまで関与しているのではないかと考える作品として、『万葉集』巻五の「松浦川に遊ぶ」という長文の序を添える大伴旅人他の十二首がある。その序文を掲出する。[注6]

「余、暫に松浦の県に往きて逍遙し、聊かに玉島の潭に臨みて遊覧するに、忽ちに魚を釣る女子等に値ひぬ。花の容双びなく、光りたる儀匹なし。柳の葉を眉の中に開き、桃の花を頬の上に発く。意気雲を凌ぎ、風流世に絶えたり。僕問ひて曰く、誰が郷誰が家の児らそ、けだし神仙ならむかといふ。娘等皆咲み答へて曰く、児等は漁夫の舎の児、草の庵の微しき者なり。郷もなく家もなし。何そ称げ云ふに足らむ。ただ性水に便ひ、また心山を楽しぶ。あるときには洛浦に臨みて徒らに玉魚を羨しび、あるときには巫峡に臥して空しく煙霞を望む。今邂逅に貴客に相遇ひぬ。感応に勝へず、輙ち欵曲を陳ぶ。今より後に、豈偕老にあらざるべけむといふ。下官対へて曰く、唯々、敬みて芳命を奉はらむといふ。時に、日は山の西に落ち、驪馬去なむとす。遂に懐抱を申べ、因りて詠歌を贈りて曰く」

この序文で傍線を引いている所が、夕顔巻で「海人の子」を導き出す元になっているのではないかと考える。源氏が夕顔へ「今だに名のりしたまへ」と促すのは、「松浦川に遊ぶ」序の「誰が郷誰が家の児らそ」（〈松浦川〉と略）と尋ねているのと重なり、それに答える夕顔の「海人の子なれば」は「児等は漁夫の舎の児」〈松浦川〉とぴったり一致する。

大伴旅人のこの序文は八五三番歌の前に置かれており、以下八六三番歌まで物語的に蓬客（男）と玉島の女子たちとの

応酬が続き、少し後に関連歌が一首ある。この女子たちは「神仙」（序）や「常世の国の海人娘子」（八六五）などと表現されているように、現実の人間ならぬ神女である。その神女との出会いの場所設定がこの松浦の玉島川であることには重要な理由がある。『肥前国風土記』では、前述の〈鏡渡・褶振峯〉の前にあるのが神功皇后（気長足姫尊）伝説であり、新羅出兵の前にこの川で神意を占った。そのときに釣れたのが「細鱗」（年魚・鮎）であるが、〈松浦川〉の方でも、女子たちは鮎を釣っている。この話は『日本書紀』・『古事記』にも記載がある。つまりこの所は聖地として伝えられる場所なのである。男は異次元世界とも言うべき所で仙女に出会ったという設定である。

四

夕顔巻と〈松浦川〉との関連を見る。まず源氏は「名のりしたまへ」と氏や素姓を尋ね、それに夕顔は「海人の子なれば」と答えた。「海人」の引歌は場面としては唐突な感はまぬがれまい。〈松浦川〉では、神功皇后にちなんでその聖地で女子が鮎を釣っている場面としての「海人」は必然性がある。しかも蓬客の「誰が郷誰が家の児」かと氏素姓を尋ねる。それに対し女子は「漁夫の家の児」で「微しき」者だから「称げ云ふ」ような素姓ではないという整然とした答えかたである。ちなみに〈松浦川〉では続く仙女の暮らしぶりの描写が、「白波の」の歌では三句目の「世を過ぐす」にまとめられているのかもしれない。

では従来夕顔の身分が低いと言われていることはどのように考えるべきであろうか。〈松浦川〉では、序文での女子の答えにもかかわらず、男は「あさりする漁夫の子どもと人は言へど見るに知らえぬうまひとの子と」（八五三）と、海人の家の子ではなく身分ある家の女子であることは分かったという。女も「玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみ表はさずありき」（八五四）と、立派すぎる男なので偽ったのだと明かす。

はたして夕顔は海人に象徴されるような低い身分素姓の女であったのか。それには「白波の」の歌の題が「遊女」であることも身分低いとされる理由なのだが、一考すべきであろう。

夕顔の死後、右近が源氏に語ったことによれば、夕顔の父は若くして「三位中将」で亡くなったとする。夕顔には頭中将が三年ほど通っていたが、その時にはすでに親は亡くなっていた（帚木）。そもそも三位中将は物語では主人公にもさ

れるような出世コースにある官位であるともいわれる。近衛中将は従四位相当であるが、中将で特別三位になった人は、源氏が十八歳であるのは別格であろうが、左大臣息の頭中将でさえも四位になって五年ほど経って二十八歳くらいで三位中将になっている。その父は夕顔を「いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさを思すめりしに」（夕顔）について、「娘を将来できれば後宮に入れたいなどと考えていたか」（新編日本文学全集の頭注）というあたりの階層である。空蝉は衛門督（従四位下）の娘でやはり入内をとの望みを親は持っていたし、末摘花は宮家の娘であり、夕顔は三位中将娘であるということは、帚木三帖の女は、「もとはやむごとなき筋なれど…時世に移ろひておぼえ衰え」（帚木）た素姓の女とみるべきなのであろう。もちろん源氏との比較においてははるかに低いからこそ「さばかりにこそ」と、源氏であろうとは見当をつけていたものの「何ならぬ御名のりを聞こえたまはん」と名のらなかったのである。

このことは夕顔が「海人の子なれば」と口にしたとき、謙遜ではあっても、その奥に矜持があったであろう。夕顔の造形に卑屈ではない、自負に裏打ちされた謙虚さがあるとすれば、それは典拠としての〈松浦川〉の神女に依拠させられている面もあるのではないかと考える。

この〈松浦川〉にはすでに指摘されているように、『遊仙窟』が下敷きにあり、「僕問曰、誰郷誰家児等、若疑神仙者乎…草菴之微者」〈松浦川〉は、「余乃問曰、承聞此処有神仙之窟宅…児家堂舎賤陋[注7]」（遊仙窟）に依っていよう。その他にも女の容姿の形容などにも類似が見られる。

〈松浦川〉の長文の序には、『遊仙窟』だけでなく、『文選』の情賦篇の「高唐賦」・「神女賦」・「洛神賦」が踏まえられている（前掲序文の★印の所はそれらの中国文学に典拠がある）。清少納言が「書は文集、文選」（枕草子）と記すように当時女にも読まれたであろう人気文学の『文選』である。「桐壺」巻で白氏文集がしっかりと踏まえられたが、次の浪漫的物語としての夕顔巻には、間に〈松浦川〉が介在して、中国文学が典拠としては隠し味とでもいうべき造形法で踏まえられているのではなかろうか。紫式部が当時人気の『遊仙窟』や『文選』といった中国文学作品を、『源氏物語』の早い段階で見逃すはずはないということも考慮してよいであろう。

五

夕顔巻の造形にどのように〈松浦川〉およびさらにその奥

の『遊仙窟』や『文選』の情賦篇が投影させられているかということを検証してみる。

〈松浦川〉では女は「神仙」（序）「仙媛」（八六五の詞書）「常世の国の海人娘子」（八六五）と神女（仙女）であることが印象付けられる。夕顔はもちろん虚構の中の現実の人間であるが、源氏の造形に取り込まれている三輪山型説話は神生みの神婚譚なのである。三輪山の神は男の方であるが、対となる女の方にも神女としてのひそかな仕掛けがなされているのではないか。源氏のみならず夕顔にも神性が付与されていると考えてよいかもしれないのは三輪山型説話に依るだけでなく、さらにその神女性は『遊仙窟』・『文選』にも由来すると見るべきであろう。

両作品の女の神女（仙女）性をあげてみる。『遊仙窟』では男が辿りついたのは、古老によれば「此是神仙窟」とされる所であり、最後に女に別れて「望神仙兮不可見」「思神仙兮不可得」と男が長吟する。男の幻想にしろ神女との表現がある。『文選』の三賦の女はすべて神女である。一応文中でのそれを表出してみる。「高唐賦」では「妾巫山之女也」とし、「神女賦」は題からしてそうであるが、文中でも「夢與神女遇」「夫何神女之佼麗兮」とあり、「洛神賦」では「河洛之神」とする。

これらの作品の神女はすべて「水」との関わりが見られる。「高唐賦」では精細な渓谷の描写を主とし、その所に遊ぶ生き物などと絡めて異次元世界を描き出す。「神女賦」では「雲夢之浦」、「洛神賦」では作者は「洛川」で神女に出会うのだが、「神滸」「潛淵」「清流」も水の場所の表現である。『遊仙窟』はこれらの神女物とは別に扱うべきであるかもしれないが、男が深淵に阻まれた所で、小舟に乗り谷川を溯ると、女が水辺で洗濯をしているのに出会うことになるのは、やはり神女性を醸し出させるものであろう。

古来水は神聖なものであり、神女と水の関わりはいうまでもないが、またこれらの作品のように、神女は深山幽谷の異次元世界に住んでいるもので、さすれば地形からも渓谷の水との縁がある。

〈松浦川〉で男が川で魚を釣る女たちと出会うのには、序文に典拠ともなるこれらの中国文学の言葉が散りばめられていることからも、読者は必然的にその先行文学作品の世界を思い浮かべることになろう。「児等者漁夫之舍児」と答える女は、男が「若疑神仙者乎」と疑ったように神女なのである。

夕顔がこの〈松浦川〉を取り込んでいるとすれば、夕顔には神女性を見なければならない。それは従来いわれているような夕顔の遊女性とはどう関わるのかという問題でもある。

六

神女性はしかし夕顔巻の構造では崇高・光輝の物語へは向かわず、古代の神話や説話の裏面ともいうべき異次元世界の幽暗や畏怖・恐怖の物語を形成することに関わったのではなかろうか。

八月十五夜の明け方という、まさに天女かぐや姫の昇天の夜、源氏は夕顔を某院へ連れ出す。そこは「荒れたる門の忍ぶ草茂り…たとしへなく木暗し…霧も深く」と不気味な邸宅であり、しかも源氏はまだ「顔をもほの見せたまはず…昔ありけん物の変化め」いたままであり、夕顔は「うはのそらにて影や絶えなむ…心細くとて、もの恐ろしうすごげに思」っている。さらに昼なお陰鬱な庭の有様が描写され、「物をいと恐ろしと思」い続ける夕顔。そして物の怪の出現となり、夕顔は死ぬ。

夕顔巻のこの構成の基調は、前述の三輪山型説話である松浦褶振峯の話に負うところの方が大きいのであろうと思うが、〈松浦川〉を介在させてみると、前述の中国文学の神女世界も揺曳しているようである。

「高唐賦」は、巫山の峻険さと谷川の荒々しさの描写に筆をつくし、猛獣でさえも驚き、気を失うほどだとする。奇岩怪石は鬼から生まれたかと思うばかりで、長く留まっていれば冷汗がふきだし、どのような人も気を失いそうになる。そのような場所を通らなければ高唐観に行き着くことはできないと述べる。他の二賦には場所の描写はないが、『遊仙窟』でも、断崖絶壁の深い谷、刀で削られたような高嶺、道は険しく鳥しか行き来できないような所に男は迷い込んだあげくに桃源郷に着くのである。

人間世界と異次元世界との隔絶、恐怖の体験なしには辿り着けない世界であることを〈松浦川〉の前段階作品が示すことは、夕顔巻にも示唆を投げかけていないだろうか。つまり源氏が夕顔を某院へ連れ出すのは、異次元世界への道行きであり、その某院の不気味さは異次元世界に入り込んだことを、夕顔物語では疑似的造形をしているのではなかろうか。

七

夕顔に神女性が付与されているとすれば、それは夕顔の人物造形にどのように関わっているかということを考えてみる。夕顔についてのもっとも大きな論点として、古注『河海抄』以来そして現在までも尾を引いているのが、「心あてにそれ

かとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」の歌に関わる問題である。実に多くの方々の発言があるが[注8]、歌の解釈はここでは措く。この歌は乳母の家の隣に咲いていた夕顔の花を源氏が随身に折り採らせようとした時に、その家の童女が、これに置いて差しあげられるようにと差し出した扇に書かれていた歌である。解釈の他にもう一つの論点は、内気で恥ずかしがりやの夕顔が、自分の方から源氏に歌を詠みかけることがありうるかということである。状況はひじょうに異なるが、夕顔が頭中将の愛人であったときも夕顔の方から中将へ歌を遣っている。

このようなこと、つまり女の側から男への積極的な行動を起こす場合を、夕顔造形の先行作品となっているかもしれない〈松浦川〉から先ず見てみる。

「今以邂逅相遇貴客。不勝感応、輙陳欵曲。而今而後、豈可非偕老哉。下官対曰、唯々、敬奉芳命于時」（今思いがけず高貴な旅のお方のあなた様にお逢いできました。うれしさを包みかねて、心の底をうち明ける次第です。これから後は、どうして共白髪の契りを結ばずにいられましょうかと。わたしは答えた、はいはい謹んで仰せに従いましょう）

蓬客が松浦川で出会った神女は、漁夫の家の子で下賤な者と答えたが、続いて非現実的暮らしかたを明かして、神女であることを男に悟らせる。引用文はその後に続く言葉である。神女は男の素晴らしさに心を押さえきれず情熱的愛の告白をし、さらに「偕老」の契りをと結婚を願う。女の方からのこの唐突な求愛は物語的に見ても不自然な感はいなめない。しかし〈松浦川〉の内容・文章ともに先蹤である『文選』の情賦の中、「高唐賦」・「神女賦」では、神女が男に出会うとき、神女の方から積極的に男に働きかけるのである。

「昔者先王嘗遊高唐、怠而晝寢。夢見一婦人、曰、妾巫山之女也。爲高唐之客。聞君遊高唐、願薦枕席。王因幸之。」（昔、先王が高唐の楼観に遊ばれた時、お疲れになって昼寝をされていると、夢の中に婦人が現れ、「私は巫山の山頂に住む娘ですが、麓の高唐観に滞在して居ります。王様がこちらにお出かけと聞きましたので、寝所にお仕えしたいと思って参上しました」と言ったそうです。そこで先王は、この女性を愛されたのです）高唐賦 序文と訳

「望余帷而延視兮、若流波之將瀾…志未可乎得原。意似近而既遠兮、若將來而復旋。褰余幬而請御兮、願盡心之惓惓」…精交接以来往来兮」（私の寝所の帳を、首を延ばして見やり、その視線は川面が今にも波たとうとしているかのようであった…私には、その意図が見抜けなかった。こちら

に近づくように見えて、遠ざかり、来るかと思えば、また引き返す。そこで私は、帳を掲げて、神女に向かい、お仕えしたいと訴え、自らの真心を尽くしたいと願った…心は交わって行き来し）神女賦と訳

「高唐賦」では神女の方の誘いかけで王と結ばれる。「神女賦」では、明らかな情意の表示はないが、やはり神女の方から興味を持ち、逡巡するような、去りかねる行動は愛情の表出とみるべきであろう。

〈松浦川〉・「高唐賦」・「神女賦」ともに、先ず神女の方から男に対して愛情表現の言葉や行動があったのである。しかして夕顔に神女性が込められているとすれば、夕顔が「心あてに」の歌を源氏に対して自分の方から贈ったとしても、それは夕顔の個性以前の、一つの類型的表現であるとみることもできるかもしれない。神女が男に愛情表現をするのは、母性神話の一つの形でもあろうし、古代的神話的話型であろう。そして神女と人間の男との関わりの時代の物語になると、人間の男は異次元世界の神女の愛を恩恵として戴くということになるのではなかろうか。

夕顔巻の構造は、三輪山型説話を基底に、物の怪の出現のおどろおどろしい場面は古代的であろうし、言葉としても「昔物語などにこそかかることは聞け」、「葛城の神」、「昔ありけん物の変化」、「荒れたりし所に棲みけんものの我に見入れけん」、「長生殿の古き例」など古代的雰囲気を散りばめているが、夕顔の人物造形にも同様に神女という古代性が隠されているとみてよいのであろう。夕顔が死ぬまで源氏にとっては謎の女であることも、疑似神女性とみることができるのかもしれない。夕顔が自分の方から歌を贈ったことに関して、当時の読者も違和感を抱いたかもしれないが、やがて「海人の子なれば」と夕顔が答えたことで、〈松浦川〉を想起できる人は、その「海人の子なれば」が、「わたしは神女なの」という含みがあることに気づいたのではなかろうか。

八

夕顔と神女の性情に共通する面があるのではないかということについても見てみたい。さらにそれはどのようなことを意味するのかということを考えなければならない。

まず夕顔の性格や源氏に対する態度などを拾い出してみると、「人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたる」、「ひたぶるに従ふ心はいとあはれげなる人」、「のどかに、つらきもうきもかたはらいたきことも思ひ入れたるさまならでわがもて

なしありさまは、いとあてはかに児めかしくて」、「いとらうたげにあえかなる心地…細やかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひあな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。心ばみたる方をすこし添へたらば」、「心細くとて、もの恐ろしうすごげに思ひ」、「いとあいだれたり」（以上は源氏の夕顔観）、「もの怖ぢをなんわりなくせさせたまふ本性」、「もの怖ぢをわりなくしたまひし御心」、「世の人に似ずものづつみをしたまひて、人にもの思ふ気色を見えんを恥づかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして御覧ぜられたてまつりたまふめりしか」（以上右近の言葉）、「はかなびたるこそはらうたけれ…女は、ただやはらかに、とりはづして人に欺かれぬべきがさすがにものづつみし、見ん人の心には従はんなむあはれにて」（源氏の言葉に右近が夕顔はそのとおりの人だという）、「らうたげ…のどけき」、「うらなき」、「はかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙を漏らし落としても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば」（以上は頭中将の夕顔観）。

これらを整理してみると夕顔は、可愛らしく、おおらか、おっとりして、従順、柔和、素直、無邪気、こだわりのなさ、恥ずかしがり、優美、怖がり、男に寄り添う甘えなどの性情がみえてくる。

そこで夕顔造形の先行作品であろうかとして見てきている作品の中で、神女たちの性情が表現されている個所を引く。

「性和適、宜侍旁。順序卑、調心腸…志解泰而體閑…澹清静其愔嫕兮、性沈詳而不煩」（性質は温和で、王の傍らにお仕えするのにふさわしく、柔順な物腰は、人の気持ちを和らげてくれるでしょう…心はゆったりとして、典雅である…神女は恬淡として、落ち着いた性格で、慎み深く、性急なところがなかった）神女賦と訳

「儀静體閑。柔情綽態、媚於語言」（動作は静かで落ち着いている。態度は柔和であり、話し方は愛らしい）洛神賦と訳

「神女賦」の神女の性格の、温和・柔順・恬淡・慎み深さなど、いわば神女の全体像に夕顔は近いところがある。「洛神賦」の神女も「神女賦」のそれに似ており、ことに話し方が「媚」と表現されるのは、夕顔の「いとあいだれたり」という印象的な記述に通底するようである。夕顔と神女との取り合わせはかけ離れているようでありながら、性格造形においても違和感はないのではなかろうか。

夕顔が源氏の愛を受け入れていくその時々に源氏に見せた性情には本性とはやや異なる、作為的な虚偽のものもあるら

しく、頭中将へ見せている、縋りつくような、虫の音に競うように泣く姿は、いわば母としての夕顔の面が濃く、源氏に見せた夕顔は女としての姿であろうか。謎めかしく、なまめかしく才気もあり、かぎりなく魅惑的である。夕顔が源氏を受け入れた当初の経緯は書かれていないが、どうもそれほど源氏を拒んだり、てこずらせたりはしなかったのではないか。それは男が源氏であろうとの見当から、慕わずにはおれなかった、女としての夕顔の情念であっただろう。

しかし神女との関連で見れば、〈松浦川〉・「神女賦」・「洛神賦」それぞれに、男への情の濃い、優しい愛情の披瀝がなされているのである。神女は本来女の理想の姿として想像されているのであろう。ゆえにそれは遊女性とは本質において異なるが、しかし男が遊女に求める愛すべき女の性情と重なるのである。夕顔に遊女性を見るのは、現象的には同じものをさしているのであるとしても、夕顔造形の本質からみれば、その差異は大きいと考えている。

性情の面からも夕顔に神女性が加味されていることに矛盾はないようである。さらに言えば、夕顔は童や女房たちにも、素姓が知れないように注意させ、自身も源氏に名乗らない。それは夕顔巻の構成からの要請でもあるに違いないが、その根底に神女の神秘性をそのような形で匂わせる意図があったのではないか。また詳述の余裕はないが、夕顔に今井源衛氏(注9)がいわれる「自我」や「自主性」を見るとすれば、それは「洛神賦」で神女が「恨人神之道殊兮」(人間と神霊では進むべき道が違うことを恨み)、あるいは「神女賦」で、男の求愛を貞節を守って受け入れないような、神女の本質的もう一面である、毅然とした孤高性や自立の姿が、夕顔の人物造形にも意図されているということではないのか。とすればそれはやはり古代的類型のもので、個性としての自我や自意識とは次元が違うものとして読むべきではなかろうか。

九

『遊仙窟』についても、夕顔には十分参照されているようである。細部の類似などは措くが、男はその場所を神仙の家と聞き、最後に男は「望神仙兮不可見…思神仙兮不可得」、神仙の女と嘆く。夕顔のなまめかしさや源氏に寄り添っていく経緯にも、そのこなれた取り込み方がうかがえるようである。さらに十娘は別れに際し、男に扇と共に、絶唱の詩を贈る。夕顔の場合は馴初めであるが、共に扇の役割の重さと、そこに書かれたものの存在があることに鑑みて、あるいは夕顔巻の扇のヒントに『遊仙窟』もあったのではないかと思う。

ところで『遊仙窟』は「幻のような山中異界は、妓楼のアナロジーであり、中国古代のポルノグラフィーとして夙に知られている」（同書、解説）とする。

鈴木日出男氏[注10]は「名に執する求婚表現は、古代の氏族共同体を母胎としてできた発想…すでに共同体の崩壊した社会の現実においてはほとんど不要であったとしても、（松浦川に遊ぶの場合（筆者注））神と人間という隔った次元での交感の発想として観念的に保存されているのだとみられる…遊女もまた行きずりの旅人とは別世界の住人として…名を明かさないという発想をとりこむことによって、別次元の二者が幻想や非日常空間で一時的にでも交わりうるというしくみ…神女と遊女との共通点にだけ執してみれば、遊女が信仰を持ち歩く巫女の後裔であったとする説が、あらためて重要になってもくる。…光源氏・夕顔の関係も、右のような発想史の延長上で造型されているとみなされる。…夕顔は、自らの素姓をけっして明かすまいとする女の表現類型に生かされているのであり、その限りで神女か遊女かの存在に近く」と、名乗りの問題から〈松浦川〉の神女へ、そこから遊女へと展開し、夕顔が神女か遊女に近い者とする。

夕顔に神女性を見ることにおいても、また夕顔が素姓を隠すのは神女性の象徴とみることを「表現類型」とされるのも拙稿の補強としてありがたい。しかし夕顔が「神女か遊女かの存在」として措かれたのは、氏の御論のテーマから外れる所であったからだろうが、私にとっては重要な問題である。

原岡文子氏[注11]には、夕顔を「遊女」と「巫女」という視座から位置づける詳述した論考がある。要約は措くが、ただ「三輪山伝説の話型導入が、神の嫁なる夕顔の巫女性を更に強固にするためにどうしても必要だった」とすることについては、拙論では別の視点を述べた。もし紫式部が三輪山型説話として『肥前国風土記』の〈褶振峯〉説話を踏まえているとしたら、女は蛇に魅入られて死ぬ運命にあり、このことを先行作品として見た神女と絡めてみれば、神女は次元が異なる人間世界の男とは結ばれてはならないのであるから、夕顔の死はこの話型からも必然のこととみられよう。

民俗学の先学たちの論考に導かれながら、巫女の抱える遊女性は現在では通説であろう。神に仕える巫女と、神そのものの神女とは本来は異なるものである。しかし『文選』情賦篇の神女たちは、神女の方から愛の眼差しを送ったりもし、優しく男を惑わすような魅惑的行動もし、男に恋をし、悲恋に泣く。まして『遊仙窟』の女は、実は男の思い込みの神女であったのか。このように中国文学作品の神女は、遊女と通底するような面があることは確かである。しかし紫式部は夕

顔に神女を踏まえているとしても、「無意識の娼婦性」[注12]は加味していないと思うのは次章のような理由もあるからである。

十

夕顔が行方知れずになって、乳母はその遺児玉鬘を同道して、大宰の少弐となった夫の赴任先の太宰府へ下り、任果てても上京のめどがたたない間に少弐は亡くなった。その後「この住む所は肥前の国とぞいひける」（以下の本文玉鬘巻）とある。大宰府の官人であった少弐は、任期中は太宰府に住んでいたはずである。「少弐の中あしかりける国の人多く」ということで太宰府にはそのまま住むことができなかったのか。それにしてもなぜ肥前なのか。乳母の長男は「豊後介」なのである。共に豊後に住む方がまだ納得できる。

玉鬘一行は、肥後の大夫監の求婚から逃れるために「松浦の宮の前の渚」から舟出をした。肥前の中でも貧しい漁村しかない玄界灘側に住んでいたとするのであろうか。荒波の玄界灘を早舟で疾走する様は迫力があり、この逃走の描写のために松浦から舟出をするコースを選んだとも考えられなくもないが、それだけではないだろう。

大夫監が玉鬘に贈った歌「君にもし心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ」、それには乳母が代作しているが、「年を経ていのる心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む」の二首には、松浦に下向した親友との贈答歌（一章に記載した『紫式部集』の18・19番の歌）を踏まえている。ということはこのところを構成記述する時、紫式部は肥前へ下って、かの地で亡くなった親友のことを思い出していたのである。その贈答の歌で紫式部は、あなたに会いたいと思う心は鏡の神がご存じと詠んだのに対して親友は、あなたに会えることだけを鏡の神に祈っていますと贈って、その後贈答が記載されていないのは、まもなく亡くなったからであろうか。互いに、特に親友は再会を切望していた。しかし果たせなかった紫式部の思いは、乳母の歌の奥に込められているのではなかろうか。鏡の神にかけて再会しようと誓ったのに、何年経ってもいや永久に会うことはできない。鏡の神様を恨みますとも読める。舟出をしたとする「松浦の宮」と称される宮は当時も存在しなかったようで、鏡の神を奉る鏡山の鏡神社を指すかと思われる。親友の祈りの拠り所の地であった松浦の宮（鏡の神の神社）から玉鬘を舟出させるためには、玉鬘を、住む必然性が薄い肥前の地で成人させなければならないという、物語の要請があったのではなかろうか。ではなぜ舟出をさせなければならなかったのか。それは玉鬘を京へ戻してやるた

めである。

紫式部にとって、玉鬘は京へ帰ることなく肥前で亡くなった親友の化身として造形された面があるのではないか。『源氏物語』の中で、京へ連れ戻してやり、幸せな女人としてのストーリーを与えてやることが、亡き親友への鎮魂であるとの思いであったのではなかったか。あるいは夕顔にも、亡き親友への鎮魂が込められているのではないかと思う。儚く亡くなった友は、『源氏物語』の中で、神女の面影を持つ女として造形され、源氏から深く愛されて、死して源氏を悲嘆の淵につき落とすほどの女であった。夕顔という魅力的女にはそのような、紫式部の思いが込められていたのではと想像してみる。

十一

まとめをしなければならない。

紫式部が義姉妹の契りをしたほどの親友が肥前の国へ下って行き、亡くなった。その友を偲び、源氏という最高の男から深く愛される幸せな女としての物語を『源氏物語』の中に創造しようと思ったのではないか。それには友が居た他ならぬ松浦地方に恰好の有名な説話と作品があった。それらを下敷きにして夕顔巻を構想し、夕顔の人物造形をしたということが考えられないだろうか。

踏まえた一つの話は書物にもなっている、『肥前国風土記』の〈褶振峯〉説話で、三輪山型説話の蛇婚譚である。顔を隠して通う源氏はその話型によっているのだが、松浦〈褶振峯〉の話のそれは、夕顔巻の主たる構成にまで示唆を与えていると見てよい。

もう一つの作品は、『万葉集』の大伴旅人他の「松浦川に遊ぶ」序と歌である。夕顔との接点の切り口は「海人の子」で、〈松浦川〉にも類似表現があり、その〈松浦川〉が踏まえる中国文学作品の『文選』情賦篇や『遊仙窟』はいずれも神女と男の愛の物語の形をとる。夕顔の造形には〈松浦川〉のみならずそれらの作品も取り込まれてはいないか。とすれば夕顔には神女性が基底にあることになるが、夕顔とそれらの神女とに齟齬はないということも検証した。

神女たちの自主的愛情表現や行動、性情には夕顔と通底する面があり、源氏に見せる夕顔の愛情表現なども、言われているような遊女性・娼婦性とは逆に、神女性に由来するものではないかと考える。

夕顔の娘玉鬘が肥前で育ち、松浦から舟出して京へ帰り着くのは、物語の中で、肥前で亡くなった友の魂を京へ連れ戻

し、約束どおりに再会することを象徴する、鎮魂の構想ではないだろうか。あるいは夕顔を神女に擬し、源氏に愛される幸せな女として構成した夕顔巻も、親友の死を悼む鎮魂の思いから書かれた巻ではなかったかとも考えている。

注

注1　この親友は誰であるのか。諸説あるが、その女性は平維時の娘で、橘為義の妻となった人で、式部とは従姉妹であった人か。平維時は長徳元（九九五）年一〇月一八日に肥前守に、橘為義は翌年一月二五日に肥前権守に任命されている。紫式部の父藤原為時は長徳二年正月に越前守になり、その年の夏に式部を同道して下向しており、親友もほぼ同時期に、父と夫、あるいはそのどちらかに従って肥前へ下ったらしい。（参考『源氏物語の基礎的研究』岡　一男　東京堂　昭和二十九年一月、『大宰府古代史年表』重松敏彦編、吉川弘文館　二〇〇七・二）

注2　『紫式部集』本文は陽明文庫本を底本とする「新潮日本古典集成」山本利達　校注　昭和五五年二月による。

注3　本文と読み下し文は『風土記』日本古典文学大系　岩波書店　昭和三三年四月　秋本吉郎　校注による。

注4　『源氏物語』本文は阿部秋生他　校注　日本古典文学全集　小学館　一九九四年三月による。

注5　「白波の」の歌は『新古今和歌集』雑下　一七〇三番に、第三句が「よをつくす」とし、「読み人知らず」で出る。

注6　「松浦川に遊ぶ」の本文と読み下し文は『万葉集2』日本古典文学全集　小学館　昭和四七年五月　小島憲之、木下正俊、佐竹昭広　校注による。

注7　『遊仙窟』本文と訳は『中国古典小説選4　唐代1』成瀬哲生　明治書院　二〇〇五年　一一月による。『文選』本文と訳は『文選（賦篇）下』高橋忠彦　新釈漢文大系　明治書院　平成一三年七月による。

注8　中島あや子「夕顔考」注（6）に詳しい。『源氏物語とその周縁』今井源衛編　和泉書院　一九八九年六月

注9　今井源衛「夕顔の性格」『平安時代の歴史と文学』文学篇　吉川弘文館　昭和五六年一一月

注10　鈴木日出男「和歌の対人性――求婚の歌と物語――」国語と国文学　昭和五八年五月

注11　原岡文子『源氏物語　両義の糸』「遊女・巫女・夕顔」有精堂　一九九一年一月

注12　円地文子『源氏物語私見』「夕顔と遊女性」新潮社　昭和四九年

本稿は平成一九年六月三日に九州大学国語国文学会で発表したものを元にしたものである

（にしまる　たえこ・元福岡国際大学教授）